
武侠の世界で

達磨大師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武侠の世界で

【Nコード】

N5821Y

【作者名】

達磨大師

【あらすじ】

とつてもマニアックな内容の2次です。金庸の武侠小説がメインです。

内容は金庸の射雕英雄伝、神雕侠侶、倚天屠龍記の3部作です。メインは神雕侠侶です。

内容

突然達磨大師に憑依してしまった、高校生の僕は見ず知らずの、気孔という名の超能力をあつかう5世紀の死亡フラグ満載の世界へ。

生活になれたところへ、突然、未来の転生者を何とかしてほしいという依頼が来て・・・僕はいつたいどうなるんですか？
今、12世紀で頑張ってます。華山論剣なにそれ？

始まりはいつも突然に（前書き）

はじめまして。 武俠小説が大好きです。 武俠が好きな方、駄文だとは思いますが生暖かい目で見守ってください。

始まりはいつも突然に

あー。

あー。

あー。

皆さん聞こえていますか？二ーハオ、ボンジュール。

僕はどうかやら、憑依してしまったようです。

死ぬ前のことは、あまり覚えていませんが、たしか、大好きなラーメンを食べていたような気がします。

そして、気付けば、僕は、師匠と仰がれていました。

周りの人からは達磨大師と仰がれているようで、ずいぶん社会的地位が高いようです。だけど・・・ぶっちゃけ困ってます。

どうも、時代がずいぶん古いようです。聞けば、どうも時代は宋らしい。いつですか？

え？言語しゃべれるのかって？それは、ご都合主義ですよ。

でも、変な事しゃべって、中身違うつてバレたら殺されそうなんのできるだけしゃべらないようにしてます。

そうそう、この時代の人は、武芸というあの超能力を使ってます。
水の上を飛んだり跳ねたり、跳躍力がハンパないです。どうやら、
軽行というらしいです。

そして、何たる事が、素手でひと殺すくらい力が強いです。強い人は、素手で気をなぎ倒してました。

それは、内力という力を内功にかえて打ち出しているそうです。気孔と同じものだと解釈しました。

筋肉のみの力とかを外功って言うらしいです。達人の領域は剣をも通さぬ筋肉になるらしいです。

怖・・・

僕ですか？

いちよう、大師ですからね、それなりに強いですよ。いやメツチャ強いです。

ために、鉄を殴ったらへこみましたからね。

そうそう、この間ペルシャから来た人に聞いたら今は540年だそうですね。

オワタ・・・2011年の高校生が、540年って

何が悲しくて座禅大好き爺さんにならなきゃいけないんだ！

そうだ、引きこもろう。うん、そうしよう。

弟子に伝えたところ、修行するための洞窟に案内された。

え？普通の事なの？修行という名の怠惰だよ？偉い人はみんなする？ニート神じゃん。

洞窟に閉じこもる事、20年

え？早い？そんな事いわれたって困る、引きこもって武術の修行してただけだよ。武術という名のニートになる為の方法だよ？どんな苦境も弾き返すニートと引きこもりの最強のオーラを発する方法だよ。そんな事聞きたいの？

そうそう、リア充爆殺のために。これ学んだら女難になるようにしといた。そして、この武功の名前は、九陽真経だ。

「あの、ノリに乗ってるところ恐縮です」

「誰あんだ？」

「あの、ですね・・・実は私は、時空管理局のものです」

「なにそれ？」

「あたまがすこぶる悪いあなたに言っ て理解できるか・・・」

「は？」

「ちょっと怒らないでください。あなたの身体、今とてつもなく凶器なんですから」

「良いから簡単に説明して」

「時空管理局はパラレルワールドや時間を管理するところでした、普段は、不測の事態で死んでしまった人に恩赦で別の時空で生活させたりするものなんです」

「不測の事態？っていうか僕は死んだの」

「ええ、不測の事態の実態は、大抵、うちの上司が間違っ て殺してしまっ たりなんですけど、神様の振 りして勝手に転生とかさせちゃうんですよ」

「それで、僕も殺されたと」

「いえいえ、あなたの場合は、死んだんではなくて、魂だけこちらに来てしまったのです。ときどき、こういうことあるんですよ。幸せすぎて魂だけ目的もなく時空を超えてしまうんです」

「はあ。それで、僕を連れ戻しに来たんですか？」

「それがですね。言いづらい、お話なんですけど、あなたの身体は生きていますので、今は病院で昏睡状態です」

「それって、臓器移植とかされませんか？」

「いえ、昏睡状態だけですから、それはありません」

「話が見えませんか」

「実はですね。この時限の未来に不測の事態で転生してしまった方がいるんですが・・・その方が時代ごと乗っ取ろうとしていてですね。時空に歪みができてしまったんです」

「歪み？」

「ええ、この歪みが広がってしまうと最終的に他の時空ごと消滅します。あなたの身体もボンです」

「は？」

「それで、大変恐縮なんですがあなたに、その時代に行っていただき歴史の修正をしていただきたいんです」

「おたくらの仕事でしょ」

「それは、そうなんですが。うちの上司が、転生特典をつけすぎてしまったせいで、どうにも私達の力ではどうにもできないんですよ」

「おたくら、無理なら僕も無理でしょ」

「いえ、あなたの武功はかなりの強さです。転生者の方は、武術は転生してから覚えるから必要最低限しか特典としてもらってません。ゆえに武功はあなたの強い」

「その転生者は、何の特典をもらったの？」

「主に魔法と魔力です」

「は？この世界で？」

「戦いがある世界という指定だったそうで、漫画の世界にいけると
思っていたようです。それで、キレて
とんでもない事しだしたんです」

「それが時代を乗っ取ろうとしているということ？」

「それもなんですが、時空に穴を開けて他の世界に行こうとしてる
んです」

「漫画の世界に行く為に？」

「はい漫画の世界に行く為に・・・」

「まあ、そいつ止めなきゃ、帰っても意味ないんだったら、行くけど
どゆ」

「さすが義侠心がありになる」

「ええつと、それで具体的に何をすれば良いの？」

「あなたをトリップさせるので転生者が生まれる前の時代に行かせます。大体12世紀あたりですね」

「転生者はいつ生まれるの？」

「13世紀あたりですね。神雕侠侶の話の中です」

「なにそれ？」

「え？知らないですか？」

「知らない」

「困ったな」

「知らなきゃまずいの？」

「その話の流れを知らないと歴史の修正はできないです」

「そうか。じゃあ知ってるやつに頼んで」

「困りますよ。今からまた、探して強くなるまで待つとか、大体この話の中にトリップする人なんてそんなにいないんですよ」

「聞き捨てならんな、強くなるまで待つてただと？」

「あつ・・・すみません。トリップする人少なすぎて」

「まあいい。それで、どうするのだ」

「うーん、じゃあ、トリップするときに情報あげます」

「わかった。それで、こっちにも特典はあるんだろうね？」

「・・・え」と

「え？ないの？」

「ありますよ。だけどしょばいですよ」

「とりあえず、言ってみて」

「年齢操作、能力操作、性別操作、後は、この次元の武術一覧から10個まで提供します」

「年齢操作って若返りができるってこと？」

「そうですね。老ける事もできます」

「よっしゃー！！！！ピチピチに戻る！！！！」

「そんなに嬉しいんですか？」

「高校生がいきなり爺さんになってみ、悲しすぎるから」

「それはたしかにそうですね。そうそう、能力操作は、ステータス変更ができます。スタミナとか筋力とか内功とかですね。あなたの場合、あまり必要性は感じないですが。」

性別操作は、性別変更できるだけです。どうしますか？」

「年齢は13歳、ステータスはムキムキにせずに全てマックスに、性別は男性」

「なぜ13歳に？」

「黒歴史をやり直したいのさ。それに、餓鬼にやられる転生者とか面白い。容姿を13歳に固定化できる？」

「できますよ。でも、年功順の世界ですよ？」

「え？僕は達磨大師としてトリップするんじゃないの？」

「ああ、そういうことですか。いや、でも誰も信じないでしょう。何百年生きてるんですか」

「肖像画を変えといてよ」

「歴史変更とか止めてくださいよ」

「良いだろ、別にあんな顔の判別できないような絵なんだから」

「駄目です」

「だったら、13歳の絵も紛れ込ませといて、メツチャ精巧なつくりにしといてよ」

「まあ、それくらいなら」

「そういえば、さっき言ってた、武術一覧とは？」

「え？ 武俠世界の武術一覧ですよ」

「いやだからさ、僕、どういう武術があるのか知らないんだよ。今の時代以外はね」

「じゃあ、僕が気に入っている武術で良いですか？」

「強いのと技主体のやつね」

「わかりました。では送りますね」

「はい」

そして、僕は12世紀の世界へ飛ばされた。

始まりはいつも突然に（後書き）

武侠の世界に魔法を持ち込んだ権力狂いを一掃しようと思っています。
次回は武侠のご都合主義が！！！！

これぞ武俠の真髓

「ここは、小屋？外は、滝？・・・どこだよ」

その時、バサつと音がして、本が落ちてきた。その本には大きく情報と書かれていた。

「多いわ！っていうか、こういう形なのね、脳に直接とかじゃないんだね」

「読むのめんどくさ、射雕英雄伝、神雕侠侶、倚天屠龍記、え？どれが何？神雕侠侶の時代に動けばいいんだよね？とりあえず、今は射雕英雄伝ってことなのか？いや、倚天屠龍記の可能性も、とりあえず読めば言いのか」

「そなた、ここで何をしておる？」

「ええ？」

「ここは、わたしの修行場の宿なのだが」

「ああ、そうなんですか。すみません。気付いたらここにいたので」

「童が来られるような場所ではないのだが、親と来たのか？」

「親はいません」

「ふむ、師匠は誰かの？」

「師匠？そんなひといません」

「おぬし、武芸が使えるだろう？」

「ええ、使えます」

「誰に習ったのだ？」

「覚えてません」

「そうかそうか」

「あの、おじさんも、かなりの使い手ですね。僕、人と戦った事ないので、手合わせしてもらえませんか」

「ふおお、変わった事を言う。人と戦った事がないか。良いぞ、手合わせしようか」

見ず知らずの人と戦う事になった達磨は、後にその人がとんでもない人だと知ることになる。

私が、師匠のところに手紙を持ってくるとそこには、信じられない光景があった。

師匠は、あるものと戦っていた。師匠の武芸をもつてすれば、いかなるものもかなうまい、そう思っていたのだが、数手見ただけで愕然とした。相手の力量もかなりのもので互角以上の戦いをしているのだ。

その上、よく見れば戦っている相手は、童ではないか。これは、もしかや、狐が童に化けているのかそう思わざるをえなかった。私とて一番弟子であるかなりの修行は積んだ。それでも、狐が化けたところなど見たことがない。しかし、目の前の光景はそうしか思えなかったのだ。

丐幫の門外不出と言うわけではないが、それに近い降龍十八掌を使い、それが終われば段家の一陽指、また、見たこともない武術も多

数使っていた、指を剣指にして、これ以上の剣法はないだろうというほど見事なものや、指先から剣指を飛ばすもの、そして何と最後に、少林寺七十二絶技までも使い出したのだ。最初の頃の多彩な武芸とは打って変わって、こちらは、尋常ではなく使い込まれかつすばらしい威力を発揮した。

いや、最初の武芸が習得できていないというわけではなく、師匠ほどのレベルが相手でなければ一撃で終わっていただろう。つまり、使い慣れていないという言葉が一番適切ではないだろうか。

どうも、童はただ、武芸を使ってみただけらしく、戦いというより演舞に近かった。それでも、武芸を極めているもの同士でなければ、無理な話であるが。

童は気が晴れたらしく、勝負を止めて、頭を下げていた。あれはなんだろうか、叩頭なのだろうか。もしや、弟子になるのか。年齢は下だが、あそこまでの武術、弟子入りする必要があるのだろうか。道士になりたいのであるとか、あれほどの武芸ならば江湖でもすぐに名が広まるだろう。

「丹陽、何をしておる。こちらへ」

「はい。そちらの小侠はどなたですか？」

「達磨と言います。よろしく願います」

「達磨か、インドからおこしか、師匠はどなたか」

「まあ、インド。師匠は忘れました」

「ふむ。師匠は俗世を離れた御方か。名は言わずによろしい。それにしても、小侠のあの多彩な武芸は
いったいどうやって身につけた？」

「それはわしも気になっておったところじゃ」

「どうやってって、練習したとしかいいようがないんですが」

「だが、門弟にしか教えぬ武芸もお主は使っておったな。まさか、
全てに弟子入りしているというま
い。七公が弟子を取ったと聞いた事もないしの」

「それに、少林寺七十二絶技をどうしてあのような威力で使えるの
だ」

「内力のせいじゃないですか？相性が良いんです」

「どのような方法で修行をするのだ？」

「これ、丹陽、その様な事きくでない」

「すみません、師匠、あまりにも驚いてしまいました」

「気持ちはわかる。これほど強い子どもはまずいない」

「九陽真経が知りたいんですか？」

「何と、九陽真経というのか」

「師匠、九陰真経と何か関係があるのでしょうか」

「関係ないですよ九陽真経は内功の修行法だけですから、九陰真経は、武術書ですよね」

「うむ、そうであったか」

「華山論剣も近いですから、突然、九陽真経が出てくるのは何かの因果ですかね」

「ところで、お主はどこか行くあてがあるのか？」

「いえ、今はどこかに行く予定はありません。でも、金は持つてるのでしばらく町で部屋を借りようか
と思っています」

「良ければ、おぬし、予定ができるまで、我らのところにいてはどうだろうか？」

「それは、良い。小侠の武芸は参考になる」

「我らですか？」

「言い忘れておったな。わしは、王重陽、このものは、弟子で馬丹陽というのだ。わしは、何人か弟子がおってな全真教と名乗ってる」

「全真教ですか、では、ご厄介になります。よろしくお願いします」

「小侠は、しっかりしている。よほどの、師匠がおられるのでしよう」

「これ、詮索するでない」

そうして、全真教に向かった。

これぞ武俠の真髓（後書き）

達磨君はいつたいどうするんでしょうね。本を読んだ後、彼は大変な間違いに気付くのでしょうか。

そして、王真人が達磨大師だと知った時、いつたいどうするんでしょうか。

真人との語り

みなさん。僕は大変な失態をしました。

歴史修正を依頼されたのに、原作の登場人物と出会ってしまい、何と一緒に暮らす事になってしまったのです。何かと話しかけられるのですが、気まずすぎてまともに会話ができません。今も、王重陽さんが僕に何かと武芸の話や哲学について問いかけてくるのだ。

僕も一様は達磨大師だったので、武術の事も道の事は知っている。ただ、問題は僕は少林派なのだ。ばれたら、身元を問いただされるのでそうとうやばい。この時代の少林寺の事は本には殆ど何も書いてなかったので良く分からない。ただ、僕が少林派でもないのに少林寺の奥義を極めているのが問題だ。ばれたら、追っ手が来るんじゃないかな。達磨大師でゝすって言ったら速攻でぶつとばされるはず。そう簡単にはやられないだろうけど、数が多すぎる。もう少し様子を見ていよう。

「達磨よ。華山論剣で何が争われるか知っておるか？」

「九陰真経を取り合うのでしょうか」

「うむ、九陰真経はとても危険なものだ。心根の良くないものの手に渡れば武林が支配されるほどの。そこで、わしは考えたのだ。なんとしても、九陰真経を手に入れねばと」

「そうですか。つわもの達が多い中、手に入れるのは大変ですね」

「そこで、おぬし華山論剣に出てはくれまいか」

「出ません」

「おぬしなら、そう言うと思うておった。おぬしほどの使い手ならば、わしとおぬしが出れば十中八九、二人のうちどちらかが手に入れることができると思うておったのだが」

「買い被りですよ。それに、華山論剣は見るのがおもしろいのです。出ては、見ることができません」

「出ては見ることはできんとな」

「出なければ見ることができない事もありますか」

「そうかそうか。しかし、武林が支配されれば金や蒙古の思いつばぞ」

「それがどうしたというんですか」

「なんと、おぬしは、どうでも良いというのか」

「川に関を立てて、水は止まるとお考えですか。川はいずれ関を破ります」

「だがの、目の前で人が死んでいくのじゃよ」

「それは、止めればいい。止める事が天命だったのです。王真人は自分の思ふとおりにすれば良いのです。それも天命です」

「おぬしにとって、武芸とはなんぞ」

「無価値」

「では、なぜそれほどの武芸を身につけた」

「知りません」

「ふむ、達磨大師のようなことを言うの」

「達磨大師の言葉をそのまま使っただけです」

「そうかそうか。今日は何をするかの」

「釣りでもしましょう」

「そうじゃの」

釣りのため、池に来て二人並んで座った。釣り糸をたらすと、王重陽が言った。

「おぬしも釣りをするんじゃの」

「釣りは好きです」

「仏教徒だと思っておったのじゃが」

「仏教徒ですよ。でも、そんなものに縛られる事の意味がないです」

「ほう」

「しょせんは、人のつくりだしたものだ。僕が守るのは考え抜く事だけ」

「黄薬師のような事をいう」

「あの人はただの偏屈な人だけです。気が合いそうではありますけど」

「そうじゃのー、あやつもおぬしの事は気に入るであろうな」

「黄薬師さんの武芸ってすごいですよね。小手先の技をあれだけ、繊細にかつ大胆、流々美麗にする事によってあれだけの奥義に行き着いたんですから」

「ふむ。小手先の技のー面白い事をいう」

「武芸なんて極めなければ小手先の技ですからね」

「武芸を極めることはできるのかの」

「痛いところをつきますね。何をもつて極めたとするのかですか。極めることは不可能ですね。肉体ならともかく、内功には終わりがありませんから」

「達磨は聡明じゃのう」

「いかれてるだけですよ」

「謙遜の仕方也不可思議よのう」

「真人もよくこんな童相手にあきませんね」

「おぬしは面白いからの」

「そうですか？」

「ほっほっほ。それにしても、おぬしは釣れんのー」

王重陽は自分はもちろん釣りなどせず、達磨の隣に座っているだけだが、あまりの釣れなさにどういう事かと思議に思っていた。仏につかえしものが釣りをするとこうなるのかと思ったほどだった。しかし、とうの達磨はニコニコしながら気にする素振りを見せなかった。はて、と思っていると釣竿をひよいとあげて釣り糸の先を見せた。あるはずの釣り針が付いておらず、ただ、糸が垂れているだけだったのだ。

「釣りではなかったのか」

「釣りですよ」

「何を釣っておるのじゃ」

「何でしょうね」

「おぬしは、ほんに解せんのか」

達磨は、焦っていたのだ。自分に質問をする王重陽の態度がどうも、子どもに対してのそれではなかった。たしかに、あれだけの武芸をみせたのだ。ただの子どもだとは思っていないだろう。だからこそ、

焦っていた。自分の素性を調べられないかと。その、焦りの中、達磨は王重陽のゆったりした雰囲気の話に答えるうちに、つい、20年以上やっていた達磨大師としての自分が出てしまっていたのだ。これが、王重陽の弟子達ならば、子どもの様に振舞えるのだが、達磨大師になってからの修行よりも、はるかに心の修行が進んでいる王重陽には、どうにも揺さぶられてしまうのだ。

「達磨よ、誰か来たの」

「そうですね、ずいぶん早いですね」

「王兄貴、何してるんだ？」

「涼んでおるだけじゃよ」

「涼んどるのか。よし、よし、わしも涼むぞ」

ドスンと座って、落ち着かない様子で、キョロキョロして達磨をみるや否や開口一番言った。

「この餓鬼は誰だ？」

「達磨というのだ。今は全真教に滞在しておる」

「誰の弟子だ？馬？は辞めとけあいつはつまらん」

「誰にも弟子入りしておらんよ」

「じゃあ何で、全真教にいるんだ？」

「客人だ」

「こんな、餓鬼が客人？偉いやつなのか？」

「さての。だが、武術はかなりのものだぞ」

「強いのか？こんなちっちゃいのが。小僧、わしと勝負だ」

「ちっちゃいんですから、先輩には勝てませんよ」

「勝てるわけがないだろ。おまえみたいなちっちゃいのが」

「じゃあ、勝負する意味なんてないじゃないですか」

「わかったわかった、勝てるかもしれんだろ。これで良いだろ、勝負じゃ」

達磨は助けを求め王重陽を見たが、目ですまんと語っていたので、仕方なく腰を上げた。

「武術ですか？」

「決まっておろう、それ以外に何がある」

「この石を、水に向けて放ち、何回、飛び跳ねるか勝負しましょう」

「なんだそれは、沈むに決まっているだろ。まあ良い。わしが勝つたら、武術比べじゃぞ」

「わかりました」

「わしから行くぞ」

そう言つて、石を投げたが、ドゴつと激しい水しぶきを上げながら沈んでしまった。何度もやってみるものの結果は同じだった。

「やっぱり、できん。お前もやってみろ」

そういわれ、達磨は石を放った。石はピョンピョン飛びはね終には向こう岸まで届いてしまった。

「何だ、どうやった。待て言つな、わしもやる」

そう言つて、男は何度も石を投げるが、その度に勢いよく水に飲み込まれていった。

「そろそろ、行きましようか」

「そつしよつかの」

達磨と王重陽は、その場を後にした。

真人との語らい（後書き）

丹陽と王重陽は呼んでいます、どうなんでしょうか？こういう名前って師匠がつけたんですから師匠はそう呼ぶのになって思ってたんですけど、馬？の方が良いんでしょうか？

丘処機の事を長春子って呼びませんよね・・・

それぞれの試練

二人が扉を開け中に入ると、そこは、草原だった。

そんな、明るい雰囲気とは明らかに違うものがそこにあった。

獅子だ。そして、獅子の前には、ハリーとジニーの母であるモリーがいた。

「ハリー、ママ」

「ハリー、パパ」

ジニーとネビルは同時に呟いた。どうやら、二人の目には違うものが見えているようだ。

「これ、どうなって・・・」

その時、獅子が言った。

「選べ、どちらを生かす」

二人は、沈黙した。

どちらかなど、選べるはずはなかった。

「では、聞こう、どちらがホグワーツを守る戦いに必要だ」

ハリー、それは、間違いなくハリーだ。だからといって、肉親を切り捨てるといえるのか。二人には、そんな事ができるはずがなかった。

「覚悟の必要がない戦いなどないぞ」

獅子は、言葉を迫った。

最初に口を開いたのはネビルだった。

「ハリー。ハリーを助ける」

ネビルにとっても自分の口から出た言葉は意外だった。自分とまともな会話をした事はない父でも、かけがえのないものだった。それでも、自分の口から出た言葉が、ネビル自身を突き動かした。その目には、凜とした真っ直ぐなものがあつた。

ジニーはネビルの目を見て、その覚悟を悟った。一見、その考えはスリザリンのようにも思えた。しかし、ジニーは悟ったのだ。この戦いに、寮は関係がない事を、そう、ハリーを守る戦いなのだ。ハリーが闇の手に落ちれば、戦いは負けたも同然。希望は潰えるのだ。

「わ、私も、ハリーを選ぶわ」

震える、声で言った。自分の身体が動き出してしまわないように、自分の手で自分の身体を縛るように抱いた。その光景は、自分の心が砕けないように守っているようにも見えた。

「そなた達の、覚悟、受け取った」

獅子はそういい、父そして母を噛み砕いた。

声が出なかった。二人は、覚悟はしていても、自分の肉親が殺されるといふ事には覚悟が幼すぎたのだ。

その時、ハリーの辛い覚悟を知った。ハリーは、友でありライバルでもあった、ゼドリックを自分のせいで死なせてしまった。そして、自分の浅はかな考えで唯一の肉親といっても過言ではないほどのシリウスを失った。そして、唯一の理解者であった、ダンブルドアさえも。

「人の死ってこういうものなのね」

「覚悟が足りなかった」

獅子が言った。

「勇気だけでは戦えぬ。次へ進むがいい」

二人は無言で進みだした。

ルーナはスキップをしていた。第一、第二の試験は難なく突破し、最後の第三の試験は目前だった。日頃から、寮の絵との謎解きをしている、ルーナにとっては、第一、第二の試験の問題など朝飯前だった。いつもと、違うのは、間違えたら呪をかけられるというものだった。

第三の試験の扉を通ると、驚がいた。

「どうぞ、こちらへお嬢さん」

そこには、机と椅子があり、アフタヌーンティーが用意してあった。ルーナは促がされるように座った。

「どうぞ」

そう言っ、お茶をルーナのカップに注いだ。ルーナは、お茶に口をつけ、サンドウィッチを食べた。

「あなたは、どうして、サンドウィッチを食べたのですか？」

「サンドウィッチがおいしそうだったからだもん」

「そうですか。では、ここであなたに問います。魔法ってどうしてできたのかしら」

「魔力があるからだよ」

「魔力はどうしてできたのかしら」

「必要だったからだよ」

「ほう、では、必要のないものはできないと。では、非魔法族には魔法が必要がないというのですね。
では、なぜ、魔法族と非魔法族ができたのですか？」

「魔法族でも魔法が使えない人はいるよ」

「分ける必要がないということですね」

「違うんだもん。魔法族と非魔法族の定義がないのに、違いなんて言えないんだもん」

「見事な返しですね。これなら、この最後の問いを受ける資格がありそうですね」

「最後の問い？」

「ええ、では、これを、飲んで下さい」

そう言って、鷲はどこからともなく小さな小瓶を取り出した。

「これなに？」

「強力な毒です。この世で、最も苦しい痛みを与え、一瞬で死にいたしません」

「嘘だもん」

「なぜですか？」

「一瞬で死ぬんだったら、問いに答える暇はないんだもん」

「そうですね。じつは、先ほどの食事に少しの解毒剤を入れておきました。この毒を飲んでも10分は存命できます。その間に、この空間のどこかにある、解毒薬を探して下さい。ヒントはハッフルパフです」

「ハッフルパフ・・・」

「どうしますか、この試練は止めますか？」

「やるんだもん」

「そうですね。では毒を飲んで下さい」

ルーナは小瓶をあけ、一滴残らず毒を飲んだ。そして、ルーナはおもむろに先ほどのサンドウィッチを
食べ紅茶を飲んだ。

「なにをしているのですか？」

「さっき、これに少し解毒剤が入ってるって言ったもん。これを食べれば、また、毒で死なない時間が延びるでしょ？」

「死の前で、なかなか冷静ですね。たしかに、その方法なら少しは伸びるでしょう。それでも、早く見つけなければ死は免れませんよ」

「薬は、もう見つけたんだ」

「ほう」

「あなたが持つてるんだもん」

「なぜそう思うのですか？」

「こんなところから、10分で探すなんて無理なんだもん。それに、解毒薬を料理に入れたんなら、あなたが、持ってなきゃおかしいんだもん」

「冷静ですね。では、私から奪って下さい」

「奪う？」

「知恵だけでは、戦いはできません」

そう言って、鷲は巨大化し、とても大きな翼を広げた。

「強さの道開かないんだけど」

ドンドンと扉を叩くがまったく動く気配がない。術を使ってみてもうんともすんとも言わないのだ。

しかたないので、別の扉に行こうとスリザリンの扉を開けると超巨大な蛇が確実に目が合うように微動だにせずドアの真ん前で目を最大に開けていた。どう考えてもバジリスクです。入ってきたやつを、速殺する気満々です。邪眼の力をなめるなよとも言いたげです。扉を開ける瞬間に、気配を感じて結界を張ってなかったら、確実にOUTでした。今も、結界に顔を貼り付けんばかりにガン見してます。

「あの、どいて」

「シュー」

「どいてよ」

「シューシュー」

「僕には、その言葉分らないんだって」

「シューシューシュー」

「だから、そんなにガン見されても困るんだけど」

すると、バジリスクは、ショックを受けたように目を見開き、頭を地面につけ拗ねたようにシューシュー言っていた。

「ごめん、先に行くから、悪いんだけど君を踏んでいくね」

この、先に進むには、道の幅もあるバジリスクに退いてもらうか、バジリスクの上を行くしかなかった。多分、パーセルタングの専用道なのだろう。

ごめんと思いつながら、地面にへたり込んでいるバジリスクの頭の上

り歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5821y/>

武侠の世界で

2011年11月24日01時50分発行